

タイトル: プレームチャンド『ゴードーン』の《農村章》及び《都市章》の二部構成に関する一考察

## ■目次

序

第1章 小説『ゴードーン』について

1-1 『ゴードーン』の構成上の特色とタイトル

1-2 『ゴードーン』の梗概

1-2-1 農村章の梗概

1-2-2 都市章の梗概

第2章 プレームチャンドの作家的性格と評論「金融文明」への導入

第3章 評論「金融文明」について

3-1 「金融文明」の概要とその内容

3-2 『ゴードーン』と「金融文明」との関係に言及した先行研究

第4章 『ゴードーン』における封建文明と金融文明

4-1 『ゴードーン』中の実例

4-2 結論

跋

《付録》プレームチャンド「金融文明」全訳

参考文献

## ■『ゴードーン』構成上の特色

①《農村章》(grām-kathā)と《都市章》(nagar-kathā)の交代によって織り成された二本柱の小説であること。

⇒具体的な章分けは以下の通り。

《農村章》(全36章中21章) …1, 2, 3, 4, 5, 9, 10, 11, 12, 14, 17, 20, 21, 22, 24, 25, 26, 29, 34, 35, 36

《都市章》(全36章中15章) …6, 7, 8, 13, 15, 16, 18, 19, 23, 27, 28, 30, 31, 32, 33

②一つの章の中で、ある場面から、時間・空間をまったく隔てた別の場面に、物語が切り替わることが殆んど見られないこと。

⇒一つの物語が一幕のうちに完結する、戯曲(あるいはLesedrama)の構成に似ている。

⇒自ら編集を務める『ハンス』『ジャーグラン』両誌の運営資金を捻出するために、映画スタジオThe Ajanta Cinetoneの招聘により、1934年6月から1935年4月までボンベイの映画業界に身を置いていた[Madan Gopal, 1964: 386-392, 398-400]

⇒ボンベイで学んだ映画製作上の手法を応用したために、『ゴードーン』が戯曲のような構成になったのではないか、という仮説。

⇒『ゴードーン』の執筆はすでに1932年に『ハンス』誌および『ジャーグラン』誌上ではじまっていた[Amṛtarāya, 2005: 656]。これにより上述の仮説は否定されそう。

## ■本論での問題提起

土井訳の存在. 土井久弥氏の『ゴードーン』解釈。

最初出版されたものでは全篇三十六章の中、都市生活の部分は十五章を占め、悲惨な農村生活を一層きわだたせる(原文ママ)ために都会の贅沢を描いてみせたというにはあまりにも比重が重すぎる。都会生活の部分も立派な一つの小説で、贅沢三昧にふけていた女医マーティナーが農村の奉仕に専念するにいたる経過を描いているのである。しかしこれら都市生活の章は農村生活の部分に入りまじっていて、かえって小説を読みにくくしているので、都市生活の部分をきり離れたほうが遥かにすっきりする。[土井訳, 1959: 373]

⇒《農村章》が主で《都市章》が従であるとする解釈に基づき、《農村章》のみを切り取った抄訳。

⇒本当に《都市章》は《農村章》の引立て役にすぎないのか。

## ■『ゴードーン』の梗概

《農村章》小作農ホーリーと彼の村の人々を中心とした物語。

《都市章》地主ラーエサーハブと彼の取り巻きを中心とした物語。

## ■プレームチャンドの作家的性格と評論「金融文明」への導入

プレームチャンドは「農村作家」か？

⇒出生地はバナーラス近郊の小村ラムヒー。

プレームチャンドはたしかにあらゆる階層、あらゆる種類の人々について書いている。しかし、彼は主に農民達の作家であると言われる。彼は農民達のあいだに生れ、農民達のあいだでこそ成長した。彼の宅は農村にあり、先祖から引き継いだいくらかの土地があった。その土地によって彼は、農村の秩序と精神的に結び付けられていたのだった。[Haṃsarāja Rahabara, 2006 : 242]

しかし、教職に就くとゴーラクプル、カーンプル、バナーラス、バステイーなどを転々とし[Dhīrendra Varmā, 2010 : 357]、前述のようにボンベイの映画業界に身を置いていたこともあった。

⇒「農村作家」のイメージが付きまとうプレームチャンドではあるが、実のところは農村よりもむしろ都市の空気の中にいることが多かった。

⇒ところが、文学者ウペンドルナート・アシュクは「生涯の大半を都市で過ごしながらも、寿命の限り農村の中にいた」「たとえ身体的には都市に住んでいたとしても、精神的にはつねに農村の中にあつた」との評価を下している[Upendranātha 'Aśka', 2008 : 29]。プレームチャンドとウペンドルナート・アシュクのあいだには文通があつた。

人間、できる事ならば、何処か農村に行つて暮らそう。何頭か動物を飼つて、人生を村人達の世話に費やそう。(…)周りの状況が、私を引っ張つてきては打つちやってしまう、こんな都市の生活のせいで、私は精神的、感情的に痛めつけられている。農村の静謐な生活こそが、私の希求する最上の場所だ。貴方は私自身が一介の農村の人間(dehātī ādmī)であることを御存知である。私の文筆業の大半は、私の上に降りかかつた、わが農村の兄弟達の借りを返すことに、なつてしまつているのだ。([Premacanda, 1962 : 241]。傍点、括弧内は佐藤による)

同じ手紙の前半部分に、次のような一節がある。

この金融時代において、金のないのは難儀である。人生がまるで駄目になってしまう。だがしかし、貧困と苦難のうちにも或る種の道徳的側面があつて、まさにその試練の中でこそ、人間は人間となり、自らを恃むことができるようになるのだということも、忘れてはならない。(傍点は佐藤による)

⇒傍点部分の「金融時代」とは何か。

⇒この手紙の翌月に「金融文明」(Mahājanī sabhyatā) という社会評論を発表。

## ■評論「金融文明」について

はじめ 1936 年 8 月にウルドゥー語月刊誌『カリーム』誌上において“Mahājanī tahzīb” (ウルドゥー語の tahzīb は、ヒンディー語の sabhyatā におおよそ相当する語。「文明」などの意) というタイトルで掲載され、さらに翌 9 月に、そのヒンディー語訳“Mahājanī sabhyatā”が『ハンス』誌に掲載された。

⇒同年 10 月 8 日に亡くなつたプレームチャンドが、人生の終極に辿りついた思想の到達点を読み取ることができるという点において、意義深い評論。プレームチャンドの息子で文学者のアマリト・ラーエ曰く、「金融文明」はプレームチャンドの「遺書 (vasīyatnāmā)」[Amṛta Rāya, 2005 : 644]。

巻頭にエピグラフとしてハーフェズのガザルが掲げられている。

mozhde ey del ke masīhā-nafasī mī āyad  
ke ze anfās-e khoshash bū-ye kasī mī āyad  
心よ、吉報だ、かのキリストの息の力を有つ者が遣つてくる  
その芳しい息から、誰かの匂いが漂つてくる

⇒プレームチャンドはどのような意図をもってこのガザルを引いたのか。詩中の「誰か (kasī)」とはいったい誰なのか。

⇒ハーフェズ学者の伝統的な解釈と異なる、プレームチャンド独自の意図。

## ■『ゴードーン』と「金融文明」との関係に言及した先行研究

[Kṛṣṇadeva Jhārī, 1975 : 85-90]…金融文明の時代になったことで、これまで権勢を誇っていた封建領主層、或いは地主層が、これから金融業者にとって替わられていくことを、『ゴードーン』からの豊富な例を挙げながら、詳らかにした。殊に、後述するカンナーとラーエサーハブとの会話を傍証として、金貸しを代表するカンナーの立場が、地主を代表するラーエサーハブのそれに優越していることを示してみせた。

[Sadānanda Śāhī, 2006]…《農村章》に見られる、村の金貸したちによる金融業は「時は金なり」「ビジネスはビジネス」といった金融文明の原理に従っているのではなく、むしろ「良心 (dharm)」や単なる誓約、口約束によって保証されるような、一種の信頼関係の上に立って行動している、ということを描いた。また、「金融文明」と『共産党宣言』との文言上の類似を描いた。

ブルジョア階級は、支配をにぎるにいたったところでは、封建的な、家父長的な、牧歌的ないっさいの関係を破壊した。かれらは、人間を血のつながったその長上者に結びつけていた色とりどりの封建的きずなをようしやなく切断し、人間と人間とのあいだに、むきだしの利害以外の、つめたい「現金勘定」以外のどんなきずなをも残さなかった。かれらは、信心深い陶醉、騎士の感激、町人の哀愁といったきよらかな感情を、氷のようにつめたい利己的な打算の水のなかで溺死させた。 [大内・向坂訳, 2007 : 45]

[Śivakumāra Mīśra, 2006]…カンナーとラーエサーハブとの会話のほか、オーンカールナートがラーエサーハブに 100 人分の購読料を払わせることになった事件についても言及した。また、『ゴードーン』の主題のひとつとして農民の借金問題がつぶさに描かれたのは、プレームチャンド自身が『ゴードーン』執筆当時、借金問題に煩わされていたためだ、という説を紹介した。(但しこれは[Rāmavilāsa Śarmā, 1955 : 115]と[Hamsarāja Rahabara, 2006]の両書においてすでに指摘されている。)

## ■『ゴードーン』中の事例

### ①典型的な「農村的思考」の例

⇒個人としての在り方よりも共同体への帰属をより重視する。

ジュニヤを匿っていたことに対して 100 ルピーという高額な罰金を課せられたホーリーの描写。

共同体 (birādārī) から離れた生活というものを、彼は想像だにできなかった。冠婚葬祭のすべては共同体の手のうちにある。共同体は彼の生活の中に、木のように根を張っていたのだった。そうして彼の血管、彼の産毛の一本一本に至るまでが、それに貫かれているのであった。

[Premacanda, 1996 : 122]

⇒損得勘定を捨てて他人の良心の判断を信頼する。

ボーラーがホーリーの雄牛を連れて帰ろうとしたときの、村の人々の反応。

パテーシュワリーは悄然として言った。

「おまえが良心に任せるんなら、無理強いはできん。あいつの良心が、連れて行くと言ったんだ。ほら行きな、雄牛はおまえのもんだ」

ダーターディーンも同意した。

「ああ、良心ということになると、誰も口出しはできん」 [Premacanda, 1996 : 146]

### ②典型的な「都市的思考」の例

⇒金融文明の原理（「時は金なり」「ビジネスはビジネス」）に従って行動する。

カンナーと、彼に大金を借りに来たラーエサーハブとの会話。

カンナーは驚いて言った。

「すると貴方は、選挙に 20 万もつぎ込むんですか？」

「選挙の問題ではありませんよ。これは名誉の問題です。私の名誉が 20 万にも値しないとでもお考えで？ 私の領地がすべて売りに出されたって、悲しくはない。しかし、スールヤプラタープシンには、容易く勝たせはしないつもりです」

カンナーは少時、煙を燻らせたのち、答えた。

「銀行の状況は、あなたにお伝えした通りです。銀行は一樣に取引を終えてしまっています。貴方に格別の御景員ができるよう努力はしますが、しかし、ビジネスはビジネス、これは御存知でしょう」 [Premacanda, 1996 : 217] (傍点は佐藤による)

■主要参考文献

〔日本語〕

- 大内兵衛・向坂逸郎訳, 2007, 『マルクス エンゲルス 共産党宣言』岩波書店 (岩波文庫)  
土井久弥訳, 1959, 「牛供養」『インド集』辻直四郎ほか訳, 筑摩書房 (世界文学大系)  
土井久弥, 1983, 「インドの作家たち(17) プレームチャンドのダルム」『インド文学』第十七号, インド文学会  
中村元編, 1967, 『インド文化』第7号, 日印文化協会  
前田愛, 1992, 『都市空間のなかの文学』筑摩書房 (ちくま学芸文庫)

〔英語〕

- Gordon C. Roadarmel (tr.), 2002, *The gift of a cow : a translation of the classic Hindi novel Godān* (by Premchand), Indiana, Indiana University Press  
Madan Gopal, 1964, *Munshi Premchand : a literary biography*, Bombay, Asia Publishing House

〔ヒンディー語〕

- ・プレームチャンド自身の手になったもの  
Premacanda, 1936, *Go-dāna*, Banārasa, Sarasvatī-Presa  
Premacanda, 1954, *Go-dāna*, Banārasa, Sarasvatī Presa  
Premacanda ; Rāmavilāsa Śarmā (pref.), 1996, “Godāna”, *Premacanda Racanāvalī*, vol. 6, Dillī, Janavāṇī Prakāśana  
Premacanda ; Amṛta Rāya (saṅkalana-lipyantara-śabdārtha), 1962, *Ciṭṭhī patrī*, vol. 2, Ilāhābāda, Haṃsa Prakāśana  
Premacanda ; Rāmavilāsa Śarmā (pref.), 1996, “Mahājanī sabhyatā”, *Premacanda Racanāvalī*, vol. 7, Dillī, Janavāṇī Prakāśana  
Premacanda, 2008, “Mahājanī sabhyatā”, *Premacanda smṛti*, Ilāhābāda, Haṃsa Prakāśana
- ・その他評論など  
Amṛtarāya, 2005, *Premacanda : kalama kā sipāhī*, Ilāhābāda, Haṃsa Prakāśana  
Dhīrendra Varmā (ed.), 2010, *Hindī Sāhitya Kośa : nāmavācī śabdāvalī*, vol. 2, Vārāṇasī, Jnānamaṇḍala Limiṭeḍa  
Haṃsarāja Rahabara, 2006, *Premacanda : jīvana, kalā aura kṛtitva : kāi bhāratīya evaṃ videśī bhāṣāoṃ meṃ bhī prakāśita*, Dillī, Sākṣī Prakāśana  
Kṛṣṇadeva Jhārī, 1975, *Premacanda kī upanyāsa-kalā kā utkarṣa : ‘Godāna’*, Naī Dillī, Śāradā Prakāśana  
Rājanātha Śarmā, 1963, *Godāna : Praśnottara śailī meṃ ālocanātmakādhyayana evaṃ viśiṣṭa sthaloṃ kī vyākhyā*, AAgarā, Vinoda Pustaka Mandira  
Rāmavilāsa Śarmā, 1955, *Premacanda aura unakā yuga : mahān upanyāsakāra ke jīvana, vyaktitvāura sāhitya kā saralā evaṃ sarvāṅgīṇādhyayana*, Dillī, Munśīrāma Manoharalāla  
Rāmavilāsa Śarmā, 1994, *Premacanda : ālocanātmaka paricaya*, Dillī, Rādhākṛṣṇa  
Sadānanda Śāhī, 2006, “Mahājanī sabhyatā aura Godāna”, *Godāna : punarvicāra*, Ilāhābāda, Abhivyakti Prakāśana  
Śivakumāra Miśra, 2006, “Godāna : grāma-kathā aura nagara-kathā”, *Godāna : punarvicāra*, Ilāhābāda, Abhivyakti Prakāśana  
Śivarānī Devī Premacanda, 1956, *Premacanda : ghara meṃ*, Dillī, AAtmārāma Eṇḍa Saṃsa  
Sudhā Siṃha, 2005, “Godāna : pitṛsattātmakatā aura alagāva kā ākhyāna”, *Premacanda*, Rājendra Śarmā (ed.), Naī Dillī, Sahamata  
Upendranātha ‘Aśka’, 2008, *Premacanda smṛti*, pp. 29-39, Ilāhābāda, Haṃsa Prakāśana  
Yajnadatta Śarmā, 2009, *Premacanda kathā sāhitya meṃ śaharī jīvana*, Ilāhābāda, Sāhitya Saṅgama

心よ、吉報だ、かのキリストの息の力を有つ者が遣ってくる  
その芳しい息から、誰かの匂いが漂ってくる

封建時代の文明 (jāgīrdārī sabhyatā) においては、強い腕つぶしと丈夫な肝っ玉が、生活に必須のものの中に数えられていた。帝国主義の世においては、知性や弁舌といった美質と、命令への黙従が、生活の須要の手段であった。けれども、これら二つの時世には、諸々の悪徳とともに、幾らかの美徳も存していた。人間の良心は、まだ消え去ってはいなかったのだった。封建領主がたとい、仇敵の血をもって自らの渴きを癒していたとしても、それは大抵、自分の友人や恩人のために、命を懸けてやっていたことであつた。王がたとい、自らの命令を法律と見做して、それに背命することを決して許さなかつたとしても、彼は同時に人民の庇護もしていたし、また公正でもあつたのだった。他国への攻撃も、受けた侮辱に返報するためにやっていたか、または、自身の華やかさと威光を確立するため、あるいは、国土征服と支配拡大という勇敢なる野望に衝き動かされて、行われていたのだった。他国を征服することの目的は、決して人民の血を啜ることではなかつた。何となれば、王は一般市民を、自己満足や財産搾取という炉の燃料とは見做していなかつたからである。それどころか王は、むしろ彼らと苦楽をともにし、彼らの美質を尊重していたものだった。

しかしながら、この金融文明 (mahājanī sabhyatā) においては、あらゆる行為の目的が、ただ金のみとなっている。国家が統治されるのは、金融業者や資本家が、出来るだけ多くの利益を上げるようにするためなのである。この観点から見れば、現今の世はあたかも独り金融業者のみが支配しているかのようである。いま人間の社会は、二つの集団に分割されてしまっている。大多数が、苦しめられ酷使される人々であり、極めて少数が、権力と影響によって、大集団を自らの支配下に置いた人々である。後者の人々は、前者の大多数の人々に対して、何らの同情も、少しの気遣いも抱いていない。彼らはただ御主人様のために汗を流し、血を滴らせ、そうしてある日、ひっそりとこの世から去るよといふ、そのためだけに存在しているのである。さらに悲しむべきことに、支配階級の思想と原理が、被支配階級の内面にまで入り込んでしまった結果として、各々の人が、自らを狩人と認め、社会がその獲物であると見做している。その人自身は社会からまったく懸け離れたものであり、たとい社会と何か関係があるとすれば、それは、その人が何らかの方策か手段によって社会につけこみ、そこから得られるだけの利益を得ようといふ関係なのである。

財欲が人間の感情を完全に支配してしまっている。生れの良さ、高貴さ、美質さそして完璧さの試金石とはつまり金である。ただ金だけである。金を有つ者が、神そのものなのである。その人の心がどれほど汚れていたとしても。文学、音楽、それから芸術——すべては、財物の敷居に額衝くものに過ぎない。これほどまでに毒に染まった空気の中で生きるのは、もはや困難なことになっていっている。医者は西洋医にせよ伝統医にせよ、多額の代金を受け取らなければ、話すらしてくれない。代弁人や弁護士は、時間を金貨によって計る。美質や能力がいかに実のあるものであるかは、その経済的価値の勘定によって判じられているのである。イスラーム教学者やヒンドゥー教学者も、金持以外は金の奴隷なのであり、新聞は彼らばかりを持って囃している。この金が人間の感情と理性を支配してしまっている様子は、どの方面から攻めたてるのも困難に見えるほどである。憐憫、愛情、真実、善意の化身たる人間は、憐れみや慈しみの欠如した、冷酷な機械となってしまっている。この金融文明は、今日の社会制度が従っているところの、新たな諸規則を作り出した。その中のひとつが、時は金なり、である。かつて時間とは生活そのものであり、その至上の使用法とは、学問・芸術の習得か、さもなければ貧窮した人々の支援であつた。ところが今、そのもっとも正しい使用法とは、金を稼ぐことなのである。医者はその手を患者の脈の上に置きながら、視線は時計の針に置いている。彼の一分一分が金貨の一枚一枚なのである。もし患者がたった一枚の金貨も見せなかつたなら、医者も彼のために一分たりとも時間を割くことはできない。患者は自らの窮状を話そうと躍起になっているのに、医者はそちらをまったく意に介さない。彼は患者に、少しも関心がない。彼から見れば、その患者の意味とは、ただ彼に代金を支払う程度にすぎない。彼はなるだけ早く処方箋を書いて、また他の患者を診に行くであろう。教師が教えにやってくる、すると彼の時間は一時間と限られている。彼は時計を正面に据え置いて、一時間が経つが早いか、立ち上がった。生徒の教課が中途であっても、打棄っておかれよう、彼の知ったことではないのだ。一時間より多くの時間をどうして費やせるものか。何故といつて、時は金なりなのだから。と、このよう

な財欲が、人情や友情を名ばかりのものにしてしまったのである。夫には妻や子供たちと話をする閑がない、とすれば、友人や親類が頭数に入るものか。長く話をすれば、その分だけ幾らか稼ぐことになろう。幾らか稼ぐということこそが、人生の意義なのであって、残りはすべて時間の無駄なのである。ただし、寝食を取らなければ仕事は立ち行かない、そのような憐れな人は困窮し、終には時間を無駄にしなければならなくなる。

あなたの友人か親類が、町で名声を獲たとする。と、もう彼のお近づきになるのは無理だと悟ることである。あなたは彼のお屋敷の戸の前まで行って、名刺を届けなければならないであろう。そのお大尽は仕事が沢山あるだろうから、あなたと一言二言話をすれば、今日はもう閑がないよと素っ気ない返事をするであろう。もはや彼は拝金の徒なのであり、友情や慎みの御名には、とくに引導を渡してしまったのである。

あなたの友人に弁護士があつて、あなたが何か裁判沙汰になってしまったとしても、彼にいかなる類いの援助も期待してはいけない。もし彼が、思いやりの心を恒河に沈めてしまっていなければ、あなたに金の遣り取りの話は、恐らくしないであろうが、しかしあなたの訴訟に対しても、少しも気を向けないであろう。こんなことをするよりも、誰か知らない人の許へ行って、きちんと代金を払うほうが、ずっとましである。もし神が今にも何かしらの奇蹟を施してくださらなければ、彼の中に人間性の名は残されず、彼の一分一分は、値段でもって計られるものになってしまうだろう。

これはもちろん、無意味なおしゃべりで時間を無駄にしてしまおう、ということではなく、財欲が人間性、友情、慈愛、同情のすべてを排除してしまうほど旺盛になるのを許さないようにしよう、といった意味である。

しかしながら、あなたは、金の奴隷となった人を悪く言うことはできない。世界中で流れている思潮も、まさにこの流れの中にあるからである。名誉と尊厳とは、つねに人間の願望の目標であつてきた。学問・芸術が名誉と尊厳への手段であつた頃、人々はこれら二つを習得したり、習練していたものだった。ところが財産がその唯一の手段になったいま、人は熱心に財産を崇拜するよりほかないのである。その人は、徳を積んだ苦行者でもなければ、すべてを放擲した隠遁者でもない。またその人の見るところによると、仕事上の成功へと向う困難な旅路を、運良く踏破できる者は、王道を独歩する旅人なのである。それに成功した人間にとって、時間は財産なのである。誰かがこの原理に従うのを見て、彼もその足跡に従う。とすると、彼に何の罪があるか。名誉と尊厳への欲望は、心から拭い去れるものではない。彼は、時間を財産だと見なしていない人を省みないわけではなく、財産を有っていない人を省みないのである。たとえそれが仕事上の上司であつても、まったく省みない。人生に少しでも希望を有っている人ならば、このように軽視された状況は、堪えられないものである。そういう人は、気遣い、友情、思いやりの心を退けて、ラクシュミー女神への祈りに没頭しなければならないだろう。そうすれば、この女神の恩恵が得られるであろう。が、しかしそれは、望んでやった行為ではなく、そうするよりほか、まったく仕方がなかったのである。その人の心情は自ずから、貨殖以外のいかなる行為にも惹かれないというふうになってしまう。もしその人が、何かの集会か講演に半時間でも坐っていなければならなかったなら、監獄で時間を過ごしているも同然なのである。彼の精神的、宗教的、文化的な関心は、すべてこの中心点に集約されてしまう。そうでないことがあるか。彼は金以外に、自分のものなど何もないと見ている。愛する友人たちも何か目論見があつてやってくるのであり、家族や親類縁者も、彼の財産を拝んでいるだけなのである。もし彼が貧乏だったなら、群がってきている友人たちは一人も姿を見せなかっただろうし、家族や親類縁者でさえ一人も近寄らなかつただろう、ということを知っている。彼は、社会の中で一財産を拵えるつもりである、老年のために少し貯蓄するつもりである、子供たちが乞食をして回らなくてもすむように何かしてやるつもりである。彼はこの冷酷で非情な社会を経験しつくしている。自分の子供たちをそのような、すべての希望と期待に霜を降ろし、勇気と気概を打ち毀してしまうような、困難な状況に、陥らせたくないのである。彼は、人生の須要の一部であるすべての宿場を、独力で通過することになるであろう。そうして商売の原理によって生活を送ることなくしては、ひとつの宿場をも通り過ぎることはできないのである。

この文明のもう一つの原理はビジネス・イズ・ビジネス、つまり、商売は商売であり、そこに感情の入りこむ余地はない、というものである。かつての生活原理には、恥知らずとも言えるような、粗野きわまる、あけすけな物言いなどはなかつたのだが、それは今、新たな原理の本質となっているものである。取引の問題のあるところ、金銭の問題のあるところに、友情、思いやり、正義の通り道はないのである。ビジネスの中に友情など、どうしてありえようか！ 誰かがこの原理を持ち出してくれば、あな

たは何も答えることができないのである。言葉が出てこなくなるのである。ある男が、必要に迫られ困窮して、金貸しの友人の許に行き、ちょっと援けてくれと要求する。きっと利率を少し負けてくれるだろうと、希望も有っている。ところが、その金貸しの友人が、自分に対してさえ事務的な扱いをしてるのを目にすると、少し負けてくれるように懇願する。友情と親密さを楯にして、両眼に涙を溜めて、たいそう悲愴な声で言う―「先生、僕はいま、とても困ってるのです。そうでなければ、あなたを煩わせたりなんかいたしません。神に誓って、どうか僕の状況に、同情してください。古くからの友達だったことを、わかってください…」そこで言葉を遮って、命令口調で、こう返す―「しかしねえ、あなた。『ビジネス・イズ・ビジネス』、これを忘れておられますな」まさにこの瞬間、哀れな懇願者は、爆弾を落とされたかのごとくになる。もはや彼にはどんな論理も、理屈もない。黙って立ち上がり、帰路に就くか、あるいは、商業原理の信奉者である友人の条件を、すべて飲んでしまうか、である。

この金融文明が世界に齎した新たな諸規則のうち、もっとも致命的で、血に啜るようなものとは、まさにこの商業の原理なのである。夫婦のあいだにもビジネス、親子のあいだにもビジネス、師弟のあいだにもビジネス。人間的、精神的、社会的な、あらゆる愛で結ばれた関係は終ってしまう。人と人とのあいだに何か繋がりがあれば、それはビジネスの繋がりととなる。この「ビジネス」に、呪いあれ！もし女子が不幸にも結婚できず、自分で生計を立てられなかったなら、実家で下女になるしかない。同じように、子供たちもみな家で働いてはいるが、彼らを使用人と見做すものはない。ところが、この金融文明においては、女子は年頃を過ぎれば下女になり、兄弟たちへの労働者となってしまうのである。尊敬すべき父親も、母親でさえも、自分の孝行息子の使用人となってしまう。兄弟も他の兄弟の家に行けば客人である。もてなしのお代を払わなければならないことも稀ではない。この文明の本質は、個人主義である。あなたは、何でも自分のためにするような、利己的な人間になってしまったのである。

しかしここにおいても、私たちは誰を咎めることもできない。まさに上に挙げたような、名誉と尊厳が、将来の不安が、自分の死後の、妻や子供たちの生活の問題が、見せびらかしや虚栄の必要性が、各人の頸の上に乗っかって、身動きが取れなくなっているのである。この文明の規則を遵守しなければ、その人の将来は真っ暗となるのである。

これまで世間は、この文明の規則に従うほか仕方がなかった。有無を言わずその命令の前に額衝かなければならなかった。金融業者は自惚れて有頂天になっていた。全世界が彼の足許に顔を擦りつけ泣きついてきた。王は彼の下僕であり、大臣は彼の奴隷であり、合従連衡の鍵は彼の手のうちにあり、世界は彼の野望の前に額衝き、あらゆる国で彼が猖獗を極める。

ところが今、西の果てから昇りつつある、ひとつの新しい文明の陽が、この芝居がかった金融主義、資本主義を根こそぎにし、打ち棄ててしまったのである。その根本の主張とは、肉体労働または頭脳労働によって、何ものかを生み出す能力のあるあらゆる人間は、国家と社会にとって、至上の尊敬されるべき構成員となりうるということ、また、ただ他人の努力や父祖からの相続のみによって得た財産で、金満家となりおおせているものは、もっとも墮落した人間だ、ということである。そのような人は、国家運営に意見を挟む権利はないし、市民権を有つ資格もないのである。金融業者は、この新たな波に、周章狼狽し、取り乱してしまっている。世界中の金融業者を含めた人々の声は、この文明を呪い、これに呪詛を投げかけているのである。個人の自立や信仰の自由、自身の内なる命令に従い行動する自由にとって、この文明は攻撃的なもの、頸を絞めるようなものであると言われている。またこの文明は、種々の新たな非難が加えられ、種々の新たな名誉が削りとられて、真ッ黒に染められ、唾棄すべきもののように描かれてしまっているのである。金持ちにとって都合の好いあらゆる手段によって、この文明に対する反駁が喧伝されている。だがしかし、真実はこのあらゆる暗闇を切りさいて、その輝かしい光を世界に充たしているのである。

この新たな文明が、個人の自立というものの、爪と牙を折ってしまったことは疑いようがない。この文明の支配下では、今やひとりの資本家が、数十万の労働者の血を吸って肥るということもできないし、自らを利するために生活必需品の値段を吊り上げることも、商品売りさばくために戦争を仕掛けることも、弾薬や兵器を作って弱小な国々を抑圧することも、擅にはできない。もしこれが独立であるならば、まちがいなく、新たな文明に、独立はない。しかし、もし独立ということの意味が、快適な家、しっかりした食事、清潔な村、娯楽や運動のための施設、電気扇風機や照明、安価で迅速で簡便な裁判を、大衆が手に入れるということであれば、この社会制度における独立と自由とは、もっとも文明的であるといわれる、世界中のどの民族も得られなかったようなものである。道徳の独立ということの意味が、もし祭官・神父・イスラーム教学者という無為徒食の集団の、驕りに充ちた教説や、盲信的な陋習に遵

うことであれば、そこでは疑いなく、この独立というものが欠如しているのである。しかし、もし道徳的独立の意味が、人民への奉仕や、忍耐、社会への個人的な献身、誠実さ、肉体と精神の神聖さなどであるならば、この文明における道徳的行為の独立は、ほかのどの国でもお目にかかることのできないようなものである。

財産の多寡によって不平等が生じるところには、嫉妬、腕力、強制、欺瞞、虚偽、偽証、売女根性、姦通と、世上のあらゆる悪行が、どうしても存在しているのである。財産が過剰にはないところ、大半の人間が同じような境遇にいるところでは、どうして嫉妬が起ろう、どうして無法が生じよう。どうして売春が、姦通がなされよう。どうして法廷での偽証が行われよう、どうして盗難・強盗事件が起きよう。これらすべての悪行は、財産の齎したものである、金のお下がりである、金融文明の創り出したものである。この金融文明こそが、上のような悪行を助長したのである。抑圧され、苦しめられ、征服された人々が、この金融文明を神の摂理であると理解して、自らの位地に安住するように求めているのである。彼らのほうから少しでも反対の感情が見えたならば、彼らの頭を踏みつけるために、警察がある、法廷がある、島流しがある。酒を飲んでおきながら酔いを免れることなどできない。火を放っておいて炎が上がらないよう欲するのは、無理なのである。金がそれ自身とともに齎した諸悪は、この世界を地獄に変えてしまった。この金への崇拜を消し去ってしまえば、すべての悪も自ずから消え去るであろう。根を掘らずに、枝先の葉を落とすのは験のないことである。この新しい文明は、財産を多く持つことを、蔑むべきもの、恥ずべきもの、死に至る毒であると見做している。誰かがそこで裕福に暮らせば、その人は皆の嫉妬を受けるよりもむしろ、つまらないもの、蔑むべきものと見做されるのである。装身具を纏った女は、美女ではなく、非難の対象となる。一般の大衆社会より高い生活水準で暮らすことは、ここではあさましいことと見做される。ここでは酒を飲んで酔っ払うことはできない、過度な飲酒は、道徳的な観点からではなく、ただ社会的な観点から、罪悪と見做される。何故なら、飲酒によって人は忍耐力や辛苦に堪える力、勤勉さや精励さを失ってしまうからである。

たしかにこの社会制度は、一般大衆が自らの野望を達成できるよう便宜を図ろうとか、種々の口実を設けて彼らの勤勉さを利用しようとか、官職を得て大金を浪費しようとか、威張った様子で歩き回ろう、などという独立を、個人に与えなかった。そこにおいては、もっとも高位に就いた高官の給料も、一介の熟練した手工業者の程度である。彼は摩天楼に住むのではなく、たかだか3、4部屋のうちに暮らすことを余儀なくされる。彼の細君も、王妃や女王となって学校に寄付金を配って回るのではなく、大概は肉体労働をするか、どこかの新聞社で働く。官職を得れば、自身をお偉いさんなどではなく、人民への奉仕者であると思われたいのである。他人への支配を固めるために金銀を積み上げるという、都合のいい手段が使えないような社会制度を、金融文明の信奉者が好みはじめたなどということが、どうしてあろうか。資本家と地主は、この文明を想像するだに、震え上がってしまうのである。彼らが震えるのも無理はない。しかし、知らず知らずのうちに金融文明の愚かさを正当化しているような人々が、それを嘲り、冷やかしはじめたとき、私たちは彼らの奴隷根性を嗤うのである。人間性、精神性、崇高さ、美意識を具えた人であれば、欲望、利己主義、虚弱な精神に基礎を置くような社会制度を誉めるということは、決してできないのである。神があなたに学問・芸術の才を豊富にお与えになったなら、その至上の使用法は、それを人民や社会への奉仕に用いることなのであって、人民や社会を支配をしたり、その血を啜ったり、それを馬鹿にすることではない。

財産所有や個人資産を終結させつつあるその文明に、世界が遅かれ早かれきっと追随するであろうことは幸である。この文明が、どの国の社会構造とも、宗教信仰とも調和しないものなのか、その環境にそぐわないものであるなどという論理は、甚だしく的外れである。キリスト教の若芽はイェルサレムに萌して、その芳香は世界中に沁み亘った。仏教は北インドに生れ、世界の半分がそれを師弟の礼をもって迎えた。人間の性質は、全世界で一様なのである。些細なことで違いは起り得るが、しかし根本的に見れば、すべての人種のあいだに、隔たりは何もない。ある国に安寧を齎すような法律なり社会制度は、ほかの国々にとっても為めになるであろう。たしかに、金融文明とその信奉者は、力のかぎりそれに抵抗し、それについて墮落を促すような話を喧伝し、一般大衆を惑わし、彼らの目を眩ましてくるかも知れない。しかしいつの日かきっと、真理こそが勝利を収めるであろう。きっとそうなることだろう。